

Y07a プラネタリウムにおける日食のインターネット中継とその効果

荻原文恵、尾久土正己（和歌山大）、小澤友彦（みさと天文台）、山本文治（IIJ）、中山雅哉（東大、情報基盤センター）

日食は、「観測地が月の影に入る現象」と言える。この考え方が理解できると、宇宙空間における太陽 - 月 - 地球の位置関係が理解できる。日食は地球上で年1～2回起きており、昼間に見られる天文現象ではあるが、日食を観測できる地域は限られている。インターネットによる日食中継が行われるようになってからは、日食が見られない地域でもリアルタイムに見ることができるようになった。しかし、これまでの日食中継では、太陽の拡大映像が中心で、視聴者へは、太陽の形の変化だけが伝わり、薄暗くなっていく現地の様子を伝えることができなかった。

2005年10月3日、任意団体ライブ！ユニバースは、スペインのマドリードから金環日食のインターネット中継を行った。太陽の拡大画像の他に、今回は、デジタルカメラに魚眼レンズを取り付けた全天カメラを天頂に向けて、日食中の現地の空と周辺の様子を撮影した。撮影された映像は、インターネットを通じて、和歌山県教育センター「学びの丘」のデジタル式プラネタリウムで投影された。全天周映像をプラネタリウムに投影することによって、日食が進むにつれて空の明るさが変化し月の影に入っていく様子や、日食を現地で見ているかのような臨場感を体感できた。

日食当日、市民を対象に金環日食の全天周中継を見てもらい、日食が月の影に入る現象であることが理解できたか、アンケート調査を実施した。本講演では、中継の概要とプラネタリウムにおける投影の教育的効果について報告する。